

令和元年10月10日

報道関係者各位

---

---

## 「ドイツ捕虜関係資料」を 習志野市指定文化財に指定しました

---

---

習志野市教育委員会は、令和元年9月3日付けで、「ドイツ捕虜関係資料」を習志野市指定有形文化財(歴史資料)に指定しました。

### 【資料の概要】

第一次世界大戦(1914年～1918年)において、日本は日英同盟を根拠としてドイツに宣戦し、青島及びドイツ領南洋群島を占領しました。その結果、約5千人のドイツ及びオーストリア・ハンガリーの将兵が捕虜となり、日本各地の収容所に収容されました。

習志野俘虜収容所は、大正4年(1915)9月に設置され、最大で約千人の捕虜を収容しました。以後、大正8年12月に捕虜の解放が始まり、最後の捕虜が解放される大正9年1月に至る4年以上の長い間、習志野の地でドイツ及びオーストリア・ハンガリーの将兵が捕虜として収容所生活を送ることとなりました。

この度、新たに指定文化財となった「ドイツ捕虜関係資料」は、「エーリッヒ・カウルの日記」「ヨハネス・ユーパーシャル博士旧蔵写真」「ボトルシップ」の3件 132点で構成されます。これらは習志野俘虜収容所に収容されていた捕虜が作製したと考えられ、捕虜の暮らしぶりを現在に伝える貴重な資料です。

### 【参考 URL】

[https://www.city.narashino.lg.jp/citysales/kanko/bunkahistory/narashinosinobunkazai/GermanPOW\\_Historical-Materials.html](https://www.city.narashino.lg.jp/citysales/kanko/bunkahistory/narashinosinobunkazai/GermanPOW_Historical-Materials.html)

(市ホームページ トップページ>これが習志野！>歴史・文化・観光>ならしの歴史・文化>習志野市の文化財>ドイツ捕虜関係資料(習志野市指定文化財))

### 【その他】

令和2年1月には、新指定文化財「ドイツ捕虜関係資料」を公開する展示会を開催する予定です。

問合せ先

教育委員会 生涯学習部社会教育課  
担当：千葉 千亜紀  
電話047-453-9382



## ドイツ捕虜関係資料

### 1. 名称

ドイツ捕虜関係資料

### 2. 員数

日記1冊（附、写真2点）、写真126点（附、封筒1点）、ボトルシップ2点

### 3. 所在の場所

習志野市教育委員会 習志野市鷺沼二丁目1番1号

### 4. 所有者氏名又は名称及び住所

習志野市 習志野市鷺沼二丁目1番1号

### 5. 種別

有形文化財（歴史資料）

### 6. 適用指定基準

歴史上価値の高い歴史資料

### 7. 製作の年代又は時代

大正3年（1914年）から昭和40年（1965年）

中心は大正3年（1914年）から大正9年（1920年）ころ

### 8. 説明（別紙参照）

第一次世界大戦（1914年～1918年）において、日本は日英同盟を根拠としてドイツに宣戦し、青島（チンタオ）及びドイツ領南洋群島を占領した。約5千人のドイツ及びオーストリア・ハンガリーの将兵が捕虜となり、日本各地の収容所に収容された。習志野俘虜収容所は大正4年（1915）9月に設置され、最大で約千人の捕虜を収容した。以後、大正8年（1919）12月に捕虜の解放が開始し、最後の捕虜が解放される大正9年（1920）1月に至る4年以上の長い間、習志野の地でドイツ及びオーストリア・ハンガリーの将兵が捕虜として収容所生活を送ることとなった。ここに指定する資料は、全て習志野俘虜収容所に収容されていた捕虜が作製したと考えられ、捕虜の暮らしぶりを現在に伝える資料である。

#### （1） エーリッヒ・カウルの日記（附、写真）

習志野俘虜収容所に収容されていたドイツ水兵エーリッヒ・カウル（Erich Kaul）が遺した日記1冊及び写真2点である。平成25年（2013）、エーリッヒ・カウルの子孫から習志野市に寄付された。

日記帳は縦20.7cm、横16.4cm、厚さ1.9cm～2.1cmであり、布装ハードカバー、丸背ホローバックの突きつけ製本である。天地及び小口には静脈模様のマーブルづけがされている。表紙は角丸表紙で、厚板紙を雲形模様入りの黒い布でくるんでいる。表表紙には飾り罫で囲まれた標題紙が貼付され、「Tagebuch」(日記)とペン書きされている。裏表紙の右下隅には「篠崎謹製」と箔押しされている。背にも横線の箔押しが見られる。この日記帳はいわゆる洋式帳簿を用いていると考えられる。

日記帳本体のページは縦20.2cm、横15.8cmで、7.4mm間隔の横罫線が24本と、各ページ左右に縦のいわゆるマージン罫線が印刷されている。本体の記入可能な用紙は236ページだが、このほかにほぼ同大の紙を追加で貼付したものが4か所、14ページ分ある。また、本体ページよりも小さな紙片を貼付したものが10か所あるが、この日記の総ページ数としては、250ページとする。ただし、このうち25ページは未記入であるため、書き込みのあるページは225ページである。

日記の内容は、冒頭、1891年の自身の誕生に始まる略歴が順を追って記されたのち、1914年に軍に徴集されてから徐々に日記形式になる。以後、青島に送られ、戦闘の開始、11月の降服、東京収容所(浅草本願寺)での生活、1915年9月の習志野収容所への移転、4年以上に及ぶ習志野での生活、1919年12月の解放と1920年2月の帰国に至るまでが日記として綴られている。最後の記事は故国に帰着、上陸したところで締めくくられている。

叙述は、日々の出来事を簡潔に書き留めたものが大半を占める。多くはないながらも、心情を吐露した部分も散見される。また、習志野で採取した蛇の抜け殻及び稲穂、品川到着時に日本女性から贈られた花とカードといった実物が、貼付ないし挟まれていることも特筆される。末尾には手書きによる膠州湾・青島の地図も貼付されている。

なお、<sup>ついたり</sup>附とした写真2点のうち、小形の1点は日記の表見返しに挟まれていた。もう1点は日記に添えて寄付されたものである。習志野の前に収容されていた東京俘虜収容所で撮影されたものと考えられる。

習志野俘虜収容所に収容されていた捕虜による日記・手記は、これまでに数点が報告されているが、市内に原本が現存するのは、本例のみである。捕虜自身が書き記した記録であり、収容所における捕虜の暮らしを理解する上で極めて貴重な資料である。

## (2) ヨハンネス・ユーバーシャール博士旧蔵写真(附、封筒)

ヨハンネス・ユーバーシャール博士(Dr. phil. Johannes Ueberschaar : 1885-1965)は、明治44年(1911)ドイツ語及びラテン語の教師として来日、大阪高等医学校に在

職した。第一次世界大戦の際には志願兵として従軍した。降伏の際の日独の交渉では通訳を務めている。捕虜となった後、収容所でも通訳として活躍した。日本通であることから、収容所内で日本に関するテーマの講座を度々開いていたことは、上述の「エーリッヒ・カウルの日記」などの記録にも見えている。戦後は大阪高等医学校に復職、以後、京都大学、浪速高校、甲南高校の講師を歴任する。また昭和7年（1932）、ライプチヒ大学の日本語学教授に就任、日本文化研究所を設立して初代所長となる。昭和12年（1937）、再来日して天理外国語学校、甲南高等学校講師を歴任、第二次大戦後は甲南大学教授となった。昭和40年（1965）神戸で亡くなった。日本においてドイツ語・ドイツ文学の教育、海外への日本文化の紹介に尽力した人物である。

ユーバーシャール博士旧蔵写真は、平成30年（2018）にユーバーシャールの教え子であった黒崎勇（くろさき・いさむ）氏（甲南大学名誉教授）から習志野市に寄付された。印画紙にプリントされた白黒写真126点（附、封筒1点）である。東京俘虜収容所（浅草本願寺）・習志野俘虜収容所で撮影された写真60数点をはじめ、戦時の青島周辺と思われる写真、撮影地不明ながら日本で撮られた写真、人物写真などを含んでいる。なお、126点のうちには、同一カットを重複して焼き付けたものがある。

この写真は、その由来が明確であるとともに、習志野俘虜収容所の写真としてまとまったものであり、捕虜の暮らしぶりや収容所のようすを伝える資料として貴重である。

### （3） ボトルシップ

習志野俘虜収容所に収容されていた捕虜が、収容所を訪れた近隣住民に贈ったと伝えられるボトルシップ2点である。発見順に第1号、第2号と呼称する。収容中の捕虜が作製したと考えられ、住民との交流を示唆する資料として貴重である。第一次世界大戦時に日本に収容されていたドイツ兵捕虜が作製したとされるボトルシップは、今のところほかに久留米収容所において2例（個人蔵）が知られているのみである。

#### ① ボトルシップ 第1号

平成9年（1997）、本市津田沼在住の歌田實（うただ・みのる）氏から習志野市に寄付された。小学校教諭であった歌田氏の母親が、学童を引率して収容所を見学で訪れた際、ドイツ兵捕虜の一人から贈られたものと伝わっている。

ガラス瓶は、最大径7.98cm、全長30.2cm。細口の円筒形で、底部は上げ底（1.2cm～1.4cm）であるが第2号ほど深くない。第2号に比してなで肩の器形であり、ワインボトルの「ブルゴーニュ」型に近い。口縁部は、肥厚口縁であるが、付加した複

合口縁ではない。色調は淡緑青色透明である。型を用いた口吹きによる製作と考えられる。栓は、機械栓と考えられる。針金及び栓本体は失われている。現在のコルク栓は、習志野市所有後に付けたものであり、当時のものではない。容量は、現在の瓶との比較から720ml（4合）または750mlであろう。これらの特徴から、断定はできないが、清酒瓶（4合瓶）であった可能性が高い。

内部の帆船模型は、船体の全長15.3cm、幅1.0cmで、喫水線からマスト最上部までの高さ5.9cmである。木製である。船体は白く塗られ、黒いラインがある。この帆船は、前方2本のマスト（帆柱）に横帆、最後尾のマストに縦帆を装備していることからバーク（bark; barque）という船種に分類される。帆は取り付けられていない。第2号と異なり、旗の類は見られない。上部構造物は1か所。

背景は、右側の船首部とそれ以外で大きく異なっている。船首部では、緑を背後に灯台・建物からなる風景であるのに対し、これ以外は自然の多い海岸の景色であり、空の占める割合も大きい。これは、背景の製作法によるものである。船首以外の背景はあらかじめ紙に絵の具（油彩か）で描いておき、瓶内部に灰白色のパテ状素材を貼りつけた上に、この背景画を貼り付けたと考えられる。船首部は瓶が細くなる部分にあたるため、背景画を貼り付けることができず、木製のミニチュア建物等を配置したのであろう。

## ② ボトルシップ 第2号

平成25年（2013）、千葉市花見川区長作町在住の小川勝利（おがわ・かつとし）氏から習志野市に寄付された。このボトルシップは、小川勝利氏の母親である小川フミ氏が、その父親の形見として大切に保管していたものである。小川勝利氏によれば、フミ氏の父親は生前、現在の習志野市大久保で八百屋を営んでいたと伝わっており、習志野俘虜収容所に野菜を届けた際に知り合った捕虜から、このボトルシップを譲り受けたのではないかと推測されるという。

ガラス瓶は、最大径8.0cm、全長30.6cm。円筒形で底部は深い上げ底（4.0cm～4.7cm）である。瓶の器形は、やや肩が張るいわゆる「ボルドー」型である。口縁部のつくりは、口唇上面を面取りした直下に環状の突帯があるいわゆる「シャンパーニュ」型である。色調は緑色透明である。型を用いた口吹きによる製作と考えられる。長さ1.2cmのコルク栓が詰められている。容量は、現在の瓶との比較から720ml（4合）または750mlと考えられる。これらの特徴から、ワインボトル（750ml）であった可能性が高い。

内部の帆船模型は、船体の全長13.5cm、幅1.2cmで、喫水線からマスト最上部までの高さ6.0cmである。木製と考えられる。船体は上から黒、白、赤の順で3色に塗られている。この帆船は、前方3本のマスト（帆柱）に横帆、最後尾のマストに縦帆を装備していることから4 檣<sup>しょう</sup>バーク（4本マストバーク four-masted bark）という船種に分類される。帆は全て畳んだ状態を表現している。前から3番目のマストの頂部に淡黄色の長流旗が掲げられている。また、最後尾のマストには当時のドイツ国旗が掲げられている。上部構造物は2か所。ボートを2艘装備している。

背景は、筆を差し込んでまず空を塗った後、パテ状素材で海と背景陸地の基礎を作り、木製の灯台や建物、木の削りかけによる樹木のミニチュアを固定していると思われる。ドイツの港湾都市（例えばキール）を表現したものかもしれない。

## 9. 保存上の留意事項

エーリッヒ・カウルの日記は、製本が傷んでいる部分が見られる。また、挟まれている植物等の劣化も懸念される。エーリッヒ・カウルの日記に付属する写真及びヨハンネス・ユーバーシャール博士旧蔵写真については、写真特有の様々な劣化・退色・損傷への留意が必要である。ボトルシップについては、退色、カビの発生、剝離等が想定される。可能なかぎり温度・湿度を一定にするなど適切な環境での保存が望ましい。展示・移動や他機関への貸出についても、例えば光に曝す時間を制限するなど、十分な配慮が必要である。また、必要に応じて保存処理の実施も検討すべきである。

## 10. その他参考となるべき事項

甲南大学文学会編（1968）『ユーバーシャール教授追悼論文集』甲南大学文学会

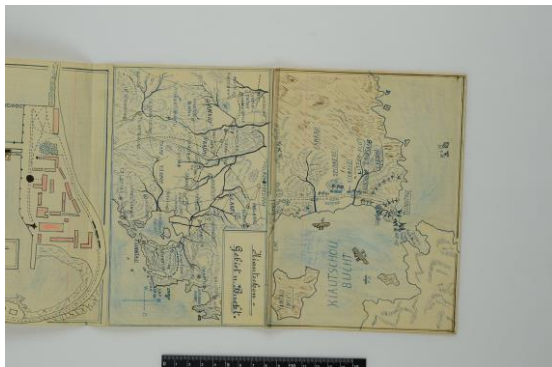
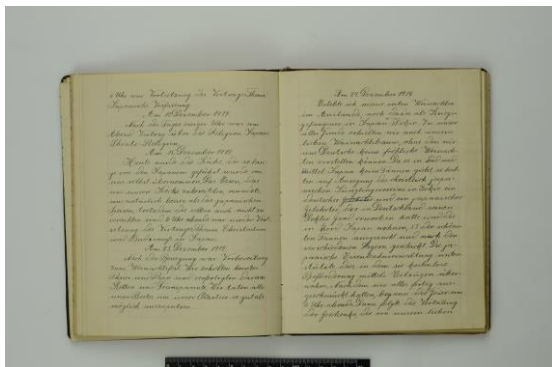
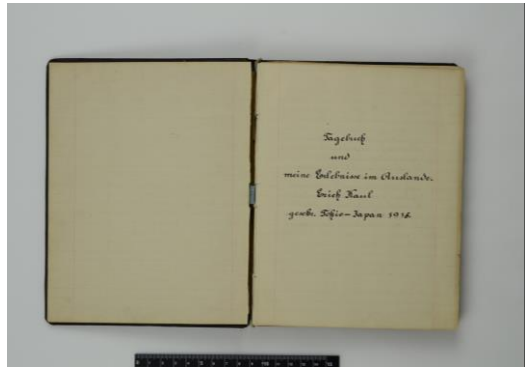
Erich Kaul; Hans Zabel (2001) *Marinesoldat in Tsingtau, Kriegsgefangener in Japan: 1914 bis 1920*, Hans Zabel.

大河内朋子（2005）「エーリッヒ・カウル『青島の水兵・日本の俘虜 1914年から1920年』」  
『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』第3号, 「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究会, pp. 93-101.

エーリッヒ・カウル 小阪清行訳「エーリッヒ・カウル著 青島の海軍兵士、日本での捕虜 1914年から1920年」 [http://koki.o.oo7.jp/06.8.31\\_Kaul\\_ja.htm](http://koki.o.oo7.jp/06.8.31_Kaul_ja.htm)

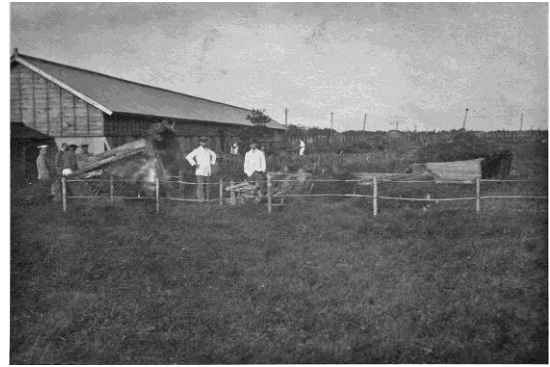
# ドイツ捕虜関係資料

## エーリッヒ・カウルの日記（附、写真）





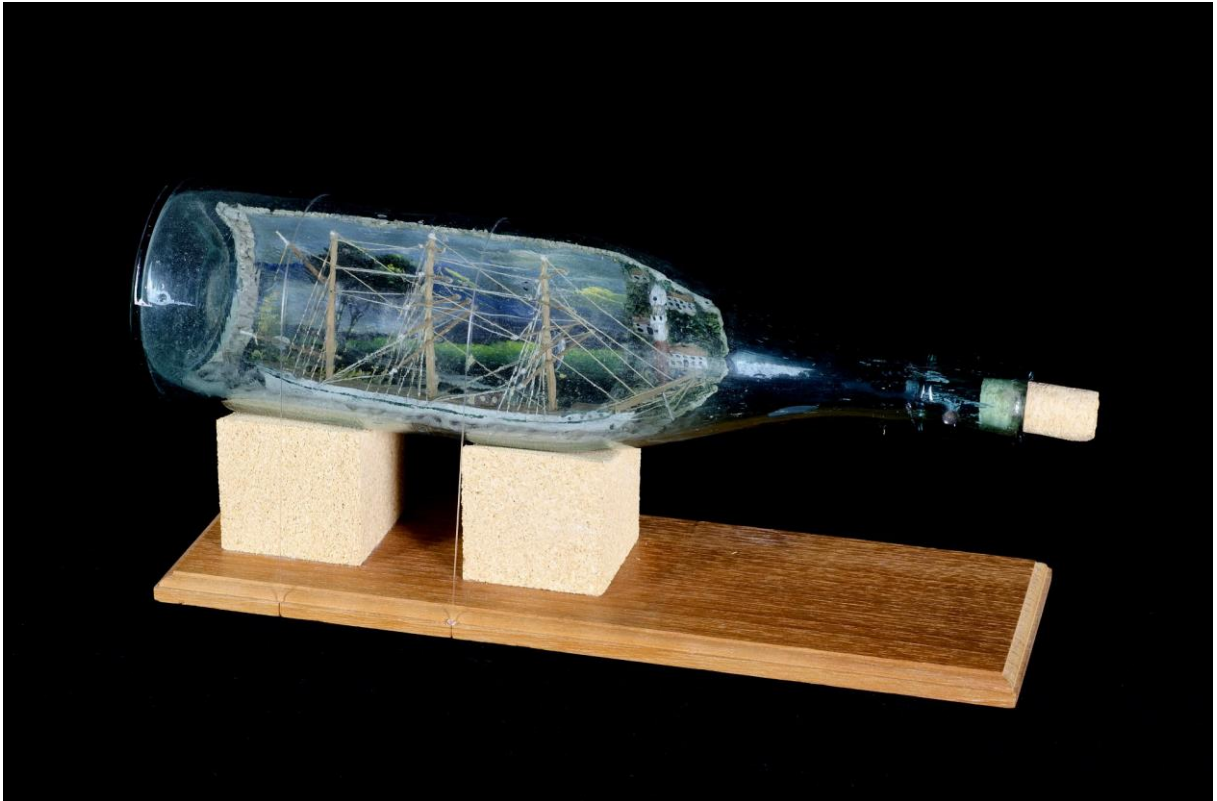
ヨハネス・ユーパーシャル博士旧蔵写真（一部、縮尺不同）



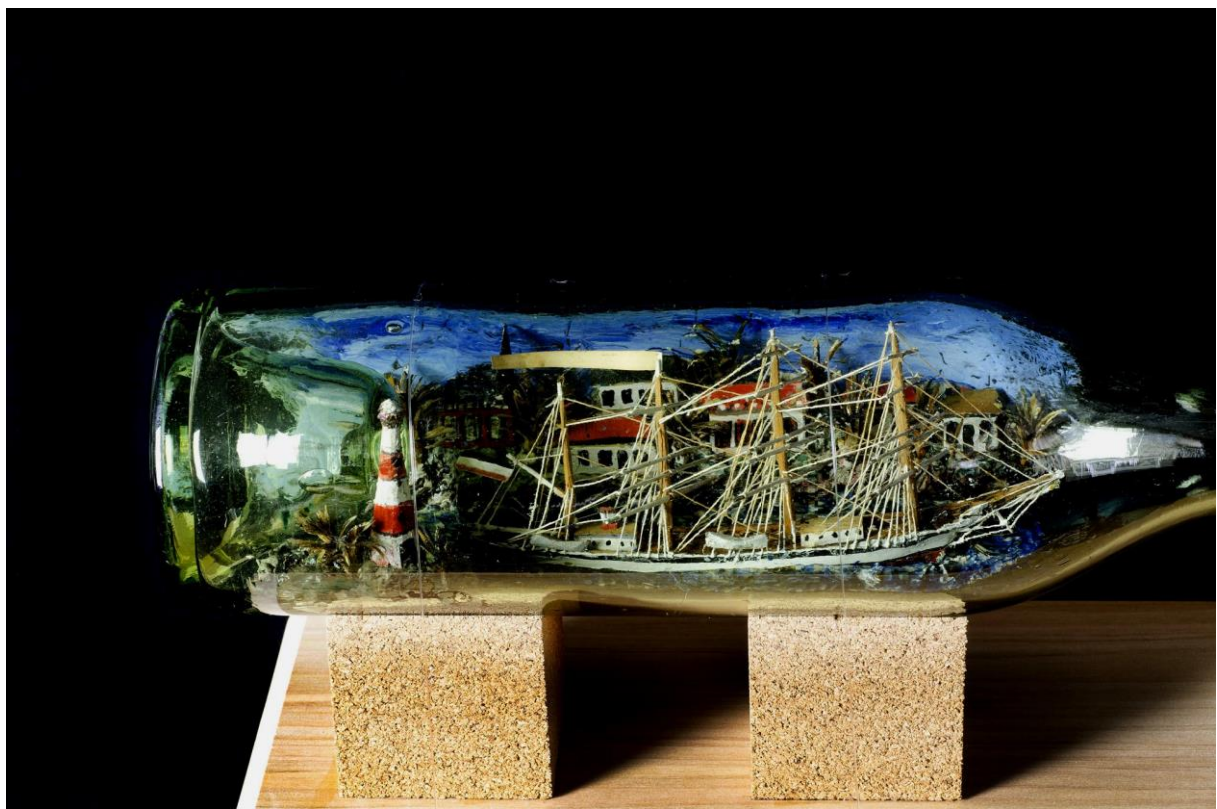
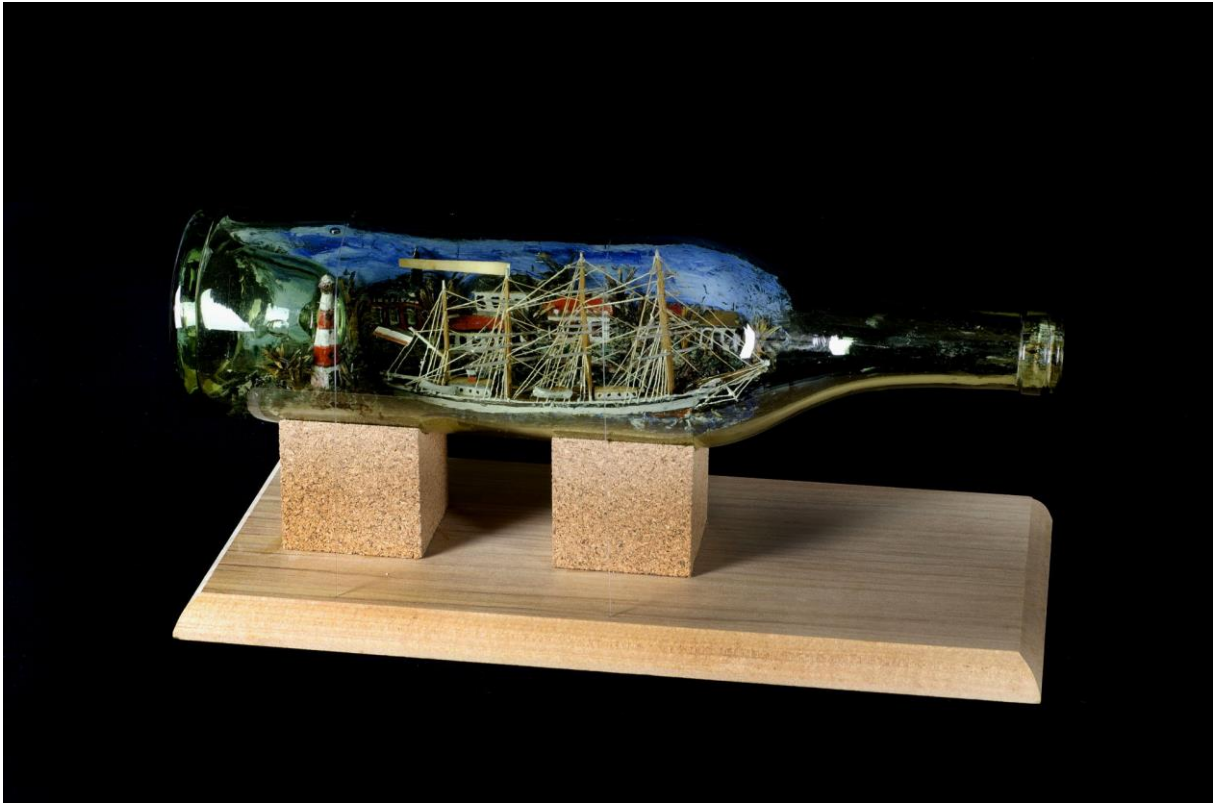


ボトルシップ

ボトルシップ 第1号



ボトルシップ 第2号



## エーリッヒ・カウルの日記（附、写真）

番号	種類	内容	時期	寸法 (cm)	備考
1	日記	エーリッヒ・カウルの日記	1914～1920 か	20.7×16.4 厚さ2.1	総ページ数250ページ
2	写真	集合写真 東京俘虜収容所	1914～1915	10.2×7.6	日記見返しに挟まれていた。 ユーバーシャール博士旧蔵写真068と同じ場所、同じ飛行船模型が写っている。
3	写真	集合写真 東京俘虜収容所	1914～1915	29.7×39.9	日記に添えて寄付された。 ユーバーシャール博士旧蔵写真070と同じ写真である（サイズは異なる）。

## ヨハンネス・ユーバーシャール博士旧蔵写真

番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
001	ドイツ将兵12人と犬 習志野俘虜収容所	—		7.5×10.9		002と同画像
002	ドイツ将兵12人と犬 習志野俘虜収容所	—		7.4×10.8		001と同画像
003	バラックと畑 習志野俘虜収容所	—		7.5×10.8		004と同所
004	バラックと畑 習志野俘虜収容所	—		7.5×10.8		003と同所
005	最南部の将校用バラックと便所 習志野俘虜収容所	—		8.2×13.7		
006	将校用バラック 習志野俘虜収容所	—		8.1×13.7		『ドイツ兵士の見たNARASHINO』p.44 IV-13
007	厨房と屠殺場（右） 習志野俘虜収容所	—		4.5×6.5	折れ 汚れ	
008	人物（男性） 習志野俘虜収容所	裏書あり	1919.8.2.か	6.1×3.9	汚れ	
009	下士卒バラックの内部 習志野俘虜収容所	—		7.8×13.3		『ドイツ兵士の見たNARASHINO』p.44 IV-16
010	人物（男性6人） 習志野俘虜収容所	—		4.4×6.5	焼け焦げ 角欠失 折れ	
011	人物（男性数人：左から2人目ユーバーシャール）と物干し場？ 奥にラウベ 習志野俘虜収容所	—		4.5×6.5		
012	人物（男性3人：左端ユーバーシャール） 習志野俘虜収容所	—		8.3×5.8	折れ	
013	人物（男性2人） 習志野俘虜収容所	—		8.3×5.7	汚れ	
014	人物（男性1人：座像） 習志野俘虜収容所	裏書あり	1919	11.5×8.2		029と同一の椅子・捕虜か
015	人物（男性1人：横顔シルエット） 習志野俘虜収容所	裏書あり		10.5×7.9	擦れ 折れ	
016	人物（男性2人）背景コスモス 習志野俘虜収容所	裏書あり	1917か	10.4×7.7		
017	人物（男性1人） 習志野俘虜収容所	裏書あり	1918	9.6×6.9	折れ	

番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
018	吉岡量平三等軍医正	表書あり	1916か	13.3×9.1		『ドイツ兵士の見たニッポン』 p.155
019	人物(男性2人)背景バラック 習志野俘虜収容所	裏書あり	1919.12.	13.5×7.9	折れ	
020	人物集合 背景バラック 習志野俘虜収容所	—		11.2×14.9		
021	人物(男性1人:料理の皿を運ぶ) 習志野俘虜収容所	—		10.6×6.4		
022	人物(男性3人:中央クーバーシャール:室内) 習志野俘虜収容所	—		5.8×8.4	折れ	
023	人物集合(男性11人) 習志野俘虜収容所	—		8.3×10.7	折れ	複写か
024	人物(男性3人:中央クーバーシャール) 背景日本家屋	—		8.8×11.9	折れ ピン穴	
025	人物集合(男性13人:1人和服) 背景日本家屋	—		8.6×10.4		右端切断 裏面日本製はがき
026	ファウスト=バル場(正面)とテニスコート(右) 奥の建物は兵用バラック 右奥建物は酒保 習志野俘虜収容所	—		8.2×13.7	折れ 指紋	
027	テニスコート(左手前)、サッカー場(左奥)、ラウベ(正面)、管理用バラック(右) 習志野俘虜収容所	—		8.3×13.8	破れ 折れ	複写か
028	サッカー場 右奥にラウベ、右端に管理用バラック 習志野俘虜収容所	—		8.5×14.1	汚れ	
029	ラウベ前で椅子を製作する捕虜 習志野俘虜収容所	—		8.3×5.9		014と同一の椅子・捕虜か
030	植物 背景バラック 習志野俘虜収容所	—		10.8×6.6		
031	菜園とラウベ 習志野俘虜収容所	—		10.8×7.5		
032	ラウベと小道 習志野俘虜収容所	—		10.7×6.5		
033	バラック脇の菜園とベンチ 習志野俘虜収容所	—		10.7×6.5		
034	ラウベとFriedrich Holzwardt 習志野俘虜収容所	裏書あり	1919	7.9×13.6		
035	北西部ラウベとバラック 習志野俘虜収容所	—		7.9×13.7		『ドイツ兵士の見たNARASHINO』 p.54 IV-54 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p.44

番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
036	人物 (男性 1 人 E. Falkenhagen か : 背景ラウベ) 習志野俘虜収容所	表書・裏書あり		8.9×11.9		
037	風見鶏のあるラウベ 習志野俘虜収容所	—		10.7×6.5	ピン穴 折れ	038と同一 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 43
038	風見鶏のあるラウベ 習志野俘虜収容所	—		10.7×6.5	擦れ	037と同一 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 43
039	人物集合 (男性 15 人・犬 1 匹) 背景ラウベ 習志野俘虜収容所	—		7.5×10.9		040と同一
040	人物集合 (男性 15 人・犬 1 匹) 背景ラウベ 習志野俘虜収容所	—		7.4×10.8		039と同一
041	ラウベ 習志野俘虜収容所	—		4.5×6.5	汚れ	042と同一
042	ラウベ 習志野俘虜収容所	—		4.4×6.5	汚れ	041と同一
043	雪のラウベ 習志野俘虜収容所	—		7.4×10.2		『ドイツ兵士の見た NARASHINO』 p. 52 IV-41 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 171
044	人物 (男性 2 人) 習志野俘虜収容所	—		11.0×7.7		『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 50
045	人物 (男性 1 人) 習志野俘虜収容所	裏書あり	1917. 03. 30.	10.1×7.6		
046	人物 (ピアノを弾く男性 1 人)	—		10.5×6.4		
047	人物 (男性 1 人 : 室内) 習志野俘虜収容所	裏書あり	1917.	10.6×7.7		
048	人物 (カボチャを持つ男性 1 人 : 背景菜園か)	—		10.9×7.6		
049	園芸棚とテーブル・椅子 右奥バラックと洗濯場か 習志野俘虜収容所	—		7.5×10.8		
050	屠殺場 習志野俘虜収容所	—		4.9×6.6		
051	葬儀 陸軍病院での納棺 (3 体) 習志野俘虜収容所	—	1919. 2. 2.	8.0×10.3		『ドイツ兵士の見た NARASHINO』 p. 88 IV-176 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 173
052	フリードリヒ・シュテルツェの葬儀 習志野俘虜収容所	—	1916. 6. 5.	8.3×10.8		『ドイツ兵士の見た NARASHINO』 p. 88 IV-175 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 157
053	葬儀 埋葬 (3 体) 習志野俘虜収容所	—	1919. 2. 2.	10.2×7.3	指紋	『ドイツ兵士の見た NARASHINO』 p. 88 IV-180 『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 176
054	葬儀 左端ユーバーシャール 習志野俘虜収容所	—		8.5×11.2		
055	葬儀 習志野俘虜収容所	—		8.3×11.0		

番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
056	葬儀 習志野俘虜収容所	—	1919. 2. 2.	8. 2×10. 9		『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 176
057	Karl Nowak・Franz Eduard Suran・Friedrich Stertzeの墓 習志野俘虜収容所	—		7. 9×13. 3		『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 158
058	青島か 破壊された家屋の前のドイツ将校と日本軍将兵	—	1914か	8. 2×11. 4		
059	青島か 破壊された家屋と日独将校2人	—	1914か	8. 3×11. 3		
060	青島か 破壊された家屋と日独将兵	—	1914か	8. 2×11. 3		
061	青島か ドイツ軍将兵	—	1914か	8. 2×11. 1		
062	青島か 破壊された洋館	—	1914か	8. 2×11. 4		
063	青島か 塹壕	—	1914か	8. 2×11. 4		
064	浅草本願寺 東京俘虜収容所	—	1914～1915	8. 9×11. 7	折れ	
065	浅草本願寺 東京俘虜収容所	—	1914～1915	8. 8×11. 6		
066	浅草本願寺 東京俘虜収容所	—	1914～1915	8. 7×11. 7		
067	浅草本願寺 東京俘虜収容所	—	1914～1915	8. 8×11. 7		
068	人物集合 ツェッペリン飛行船・複葉機・単葉機模型 東京俘虜収容所	—	1914～1915	8. 7×11. 7		『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 24
069	人物集合 (男性50人: 第2列左から2番目ユーバーシャール; 第4列左から8番目ヘルムート・ケテル) 東京俘虜収容所	—	1914～1915	11. 2×15. 0		『ドイツ兵士の見たNARASHINO』 p. 24 III-14
070	人物集合 (男性92人: ドイツ海軍将兵) 東京俘虜収容所か	裏書あり	1914～1915	10. 8×15. 4		
071	人物集合 (男性118人) 東京俘虜収容所	—	1914～1915	11. 1×14. 9		
072	人物集合 (男性50人: アルフォンス・ヴェルダ合唱団) 東京俘虜収容所	—	1914～1915	11. 1×14. 9		『ドイツ兵士の見たニッポン』 p. 63
073	人物 (乗馬する男性1人: 背景日本家屋)	—		14. 5×8. 7	欠失 折れ	
074	日本家屋と人物 (男性2人: 庭)	—		8. 6×14. 6	折れ	
075	人物 (男性2人: 右側ユーバーシャール)	—		5. 0×5. 1		
076	路地と天秤棒の物売り	—		8. 0×10. 7	角欠失、折れ	

番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
077	家屋 (078と同一家屋)	—		5.6×8.2		
078	家屋 (077と同一家屋)	—		5.7×8.2		
079	京都東福寺の松尾芭蕉古池句碑とユーパーシャール	—		7.7×5.5		ピンぼけ
080	人物 (男性3人:中央ユーパーシャール)	—		9.8×5.7		
081	花束を持つユーパーシャール 船上か	—		11.8×6.4		090と関連か
082	人物 (男性2人:左ユーパーシャール:登山か)	—		7.8×5.5		
083	人物 (男性3人:左ユーパーシャール:背景洋館)	—		4.5×5.4		
084	寺院境内のユーパーシャールと日本人男性	—		10.9×16.0		
085	人物集合 (男性11人・女性1人:左端ユーパーシャール)	裏書あり		11.4×16.1		
086	写真撮影風景 (市街地:手前ユーパーシャール)	—		15.9×11.4		
087	写真撮影風景 (乳牛:右ユーパーシャール)	—		11.4×15.8		
088	人物集合 (男性4人・女性4人:後列左ユーパーシャール) 料亭か	—		5.4×8.3		
089	人物 (男性1人)	—		6.1×8.6		
090	出航の見送り風景 (日本)	—		11.3×16.4		081と関連か
091	人物 (男性3人:和書調査風景か)	—		17.8×12.8		
092	人物 (男性1人)	表書あり		13.7×8.8		裏はハガキ罫線か
093	ユーパーシャール	裏書あり	1925か	11.8×7.4		
094	人物 (男性1人:軍人)	—		10.3×6.2		「Frankfurt a.M.(フランクフルト河畔)」と印刷された台紙に貼付
095	人物 (女性1人:グランドピアノ前)	裏書あり		11.3×8.7		印画紙外縁は不規則波状
096	人物 (男性1人)	—		10.3×6.1		表面「E. SCHROETER.」「MEISSEN.」、裏面「E. Schroeter PHOTOGRAPH.」「Obergasse:597」「MEISSEN.」「Plattenwarden 2 Jahre aufbewahrt.」と印刷された台紙に貼付。マイセンのオーバーガッセにあった写真師エルンスト・シュレーターの撮影。
097	人物 (女性1人:座像:読書:母親か)	裏書あり	1935か	9.2×6.2		100・101と同画像
098	ユーパーシャール	—		10.1×7.1		099と同画像



番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
099	ユーバーシヤール	—		10.1×7.1		098と同画像
100	人物(女性1人:座像:読書:母親か)	—		15.8×10.4		097・101と同画像
101	人物(女性1人:座像:読書:母親か)	—		15.8×10.5		097・100と同画像
102	ユーバーシヤール	—		15.0×10.0		
103	人物(男性1人:座像:喫煙)	—		16.4×10.5		表「Atelier Hoffmann」 「BOCHUM Maarbrückerstn. 10.」エン ボス加工の台紙に貼付
104	人物(男性1人)	裏書あり	1921.	14.0×8.9		裏面ハガキ状罫線
105	人物(男性1人)	—		13.5×9.1	折れ	
106	人物(男性1人: Iltis号乗組員:座像)	—		14.4×10.2	折れ	
107	人物(男性5人)	裏書あり		13.8×8.6		裏面ハガキ 「Hofatelier C. Genzel, Bad Neuenabr, Poststr. 26 u. 31. / Telefon 207.」 と印字
108	人物(男性1人:海軍下士官第三種軍衣を着用、右腕に普通科教程卒業者を示す特技章)背景寺院	—	1942以降か	15.5×9.4		上部に「7-16 = 口」の反 転文字。ネガに書き込んだ ものか。
109	人物(和装日本女性1人:110~112と同一人物)背景日本旅館?料亭?	—		8.8×14.1		
110	人物(和装欧米男性1人・和装日本女性1人:男性は111と、女性は109・111・112と同一人物)背景日本家屋の玄関	—		14.6×8.8		
111	人物(和装欧米男性1人・和装日本女性1人:男性は110と、女性は109・110・112と同一人物)縁側で茶呑み	—		8.7×14.4		
112	人物(和装日本女性1人:109~111と同一人物)庭で椅子腰掛け読書	—		8.8×14.7		
113	人物(女性1人)	—		16.8×10.7	折れ	表「A. Arnold」 「Telephon 1424」 「BOCHUM 36 Humboldtstr. 36.」と印 字された台紙に貼付
114	人物(女性1人)	裏書あり	1928. 12. か	13.5×8.5		裏面「Kamera-Bildnisse Minya Dührkoop」Hamburg, Jungfernstrieg 34」と印 字 Minya Diez-Dührkoop (1873-1929)はドイツの写 真家。
115	人物(女性2人)	裏書あり		11.8×8.6	擦れ	「Agfa Lupex」印画紙。 「Photo Hamer Bochum A 141」のスタンプ。
116	人物(女性3人)	—		9.1×12.0		複写か

番号	被写体等	書き込み	時期	寸法 (cm)	状態	備考
117	人物 (女性3人)	—		11.9×8.8	折れ 擦れ 破れ	118と同人物・同背景。
118	人物 (女性3人)	—		12.0×9.1	しわ ビン穴	117と同人物・同背景。複写か。
119	人物 (少年少女4人)	裏ペン書あり		8.6×13.5	汚れ	裏面「e 1691」「EKA」の印字。ハガキ状罫線。
120	自動車による旅行風景 子どもたち			7.6×9.9		120～126は一連。
121	自動車による旅行風景 海沿いの道			7.7×10.0		120～126は一連。
122	自動車による旅行風景 海沿いの道			7.7×10.2	汚れ 擦れ	120～126は一連。
123	自動車による旅行風景			7.6×10.0	折れ	120～126は一連。
124	自動車による旅行風景 木橋 ユーバーシャール			7.7×10.0	しわ	120～126は一連。
125	自動車による旅行風景 左ユーパーシャール			7.7×10.0	折れ	120～126は一連。126と同人物、同一撮影地。
126	自動車による旅行風景 左ユーパーシャール			7.6×10.1	汚れ	120～126は一連。125と同人物、同一撮影地。
127	〔洋封筒 (有馬研究所)〕	表鉛筆書あり	1935頃	12.5×18.8	汚れ 折れ	有馬研究所は細菌学研究のため1927年1月創立。現在の株式会社有研。

## ボトルシップ

番号	形状等	寸法 (cm)	時期	寄贈者	備考
第1号	細口円筒形 底部上げ底 淡緑青色透明	最大径 8.0 全長 30.2	1914～1920か	歌田實氏	内部帆船はバーク
第2号	細口円筒形 底部深い上げ底 緑色透明	最大径 8.0 全長 30.6	1914～1920か	小川勝利氏	内部帆船は4檣バーク コルク栓つき